

立花大敬さん「しあわせ通信」  
のお話を紹介していきます(^^)

# 立花大敬さんの言の葉

## これが私の決断

『ダイヤー博士のスピリチュアル・ライフ』  
(ウエイン・W・ダイヤー、三笠書房) という本を読みました。

訳者の渡部昇一先生によりますと、ダイヤーさんは孤児院で育ったのだそうですが、その苦勞を乗り越えて博士号を取り、准教授にまでなられた方です。その後、独立して著述家。

そうした自らの経験をもとにして、いかに自らの道を切り開いて自己実現してゆけばいいのか、その生活技術を指南する一連の著作を出せ、それが全世界で大ベストセラーとなりました『自分のための人生』、『どう生きるか、自分の人生』など。いずれも三笠書房。

ところが、ダイヤーさんはその地位に満足してとどまっていなかったのです。本を書く人は、その本の心境のレベルに止まってしまっていて、それ以上の魂の進化がみられなくなることがあるものですが、ダイヤーさんは誠実な求道者でしたから、そういうことにはならず、さらに成長を続けてゆかれたのです。

亡くなられたアルコール中毒のお父さんとの神秘的体験(どういいう体験なのか、この本には書かれていないので分かりませんが)もあって、少しずつ、パーソナル(個人的)な自己実現の立場から、トランスパーソナル(個人性を超えた)自己実現をめざす方向へと立場を変えてゆかれました。

渡部昇一先生は、今回のダイヤーさんの著書では、『他力』の概念が非常に強くなってきていると言っておられます。

つまり、大宇宙を貫く意志、無限の力、無限の愛に身を任せていけばよい。そうすれば、必ず自分にふさわしい位置に運ばれ、自分にふさわしい役割を果たせるようになる。その時、心の奥からふつふつと、尽きせぬ喜びが湧きあがってくる(私はこの状態を『湧喜』と呼んでいます。『我れ世に勝てり』という勇氣と喜びがあふれてきて、恐れがなくなります)。

渡部先生の評の一文を引用しますと、『他力の生き方を実践していくと、「勝つことを意識しなくても勝てる、あるいは望ましい成果が出る」という経験を持つようになる』とダイヤーは言うのだ。

かつては、「自分のエゴを絶対に曲げずに主張を貫くこと」を教えることで成功した人が、「エゴをむき出しにすることは無用である」というような境地になることこそ目覚ましいのではないかと思う。「勝つことを必要としない、必要としなくても勝ってしまう」というような考えである』と、渡部先生は書いておられます。

このダイヤーさんの本の中から、私が勉強になったところをいくつか紹介しましょう。

ダイヤーさんはプエルトリコへの講演旅行を終えて、午前二時三分にシカゴのホテルに到着しました。そして、とても空腹だったので、ルームサービスで、サンドイッチとジュースを頼んだのです。

すると、ルームサービスは二時までで、もう二時を過ぎたので注文は出来ないと言われました。

ダイヤーさんは、二時をわずかに数分過ぎただけなのだから、ぜひお願いしたいと頼みましたが、ダメだと断られました。

ダイヤーさんは腹を立てて、支配人に会って、その従業員への対応に抗議しようとして部屋を出たのですが、その時、プエルトリコで、『自分が求めていることに頭と精力を使っているではないか』と講演したことを思い出したので、

『ああ、そうだった。今、私が求めているのは、空腹を充たすことで、「バカにされた。ひどい扱いを受けた」と抗議することではなかった。さあ、こんなエネルギーの無駄遣いはやめて、私は空腹を充たすという目標達成のみにエネルギーを集中させるぞ!』

そうして、エレベータで降りると、ロビーに軽食を運搬しているウェイターがいるのに気がつき、声をかけました。

その時、ダイヤーさんはプエルトリコでの講演会のパンフレットを無意識のうちに手にしていたのですが、それを見てウェイターさんは「プエルトリコに行つてこれたのですか。プエルトリコは私の故郷なのですよ」と言いました。

ダイヤーさんはプエルトリコで楽しかったこと、講演した時の様子などを話しました。

「そんなわけで、こんな時間にこのホテルに到着したわけなんだけれど、とても空腹なので、サンドイッチを作って部屋に届けてもらえないだろうか」と頼みました。

すると、そのウェイターさんは、「あなたは私の故郷の仲間たちのために講演をして下さった。

私はあなたがこれまで食べたことがないような、最高のサンドイッチをお作りしますよ」と即答してくれました。

そして、その十数分後、そのウェイターさんは、ナプキンで包んだ巨大なサンドイッチと新鮮なオレンジジュースを二杯、部屋に届けてくれたのです。オレンジジュースは私のおごりだと言って代金は受け取りませんでした。

ダイヤーさんは最後に次のように書いています。

『自分が求めていることにエネルギーを注ぐのをやめて、自分が実現しようと思っていることにエネルギーを注いだとたん、天が味方をして、私の願いは実現したのだ』

とても参考になる、いい実例でした。

この世は、とても粗い世界なので、心のエネルギーを集めて、そのエネルギーがあるレベル以上にならないと現実化しないのです。

怒ったり、心配したりという、実現したい希望のこと以外の方向に心のエネルギーを散らしていると、その目標に心のエネルギーが十分集まらないので現実とならないし、怒りの対象や、恐れの対象に向けてエネルギーが集中してしまうと、そっちの方が先に現実となってしまうということにもなりかねません。

心の中に、ある思いがあるとしてもすね。その思いが何度もくりかえされていると、心の中にその思いが定着して拠点が出来るのです。

するとその拠点に向けて、心のエネルギーが集まって来て、下の図のように山のような形に盛り上がってゆき、点線のレベルを越えると現実の世界にはじめて形として現れて来ます。

先ほどのダイアーさんの例で考えると「サンドイッチが食べたい」というのが(想いa)とします。次に、「私は不当な扱いを受けた。断固抗議しよう」というのが(想いb)とします。

そして、「私は空腹のまま寝なければならぬかも知れない」という恐れ(想いc)としましょう。

ダイアーさんの場合、強気の人だから、(想いc)に心のエネルギーが集まることはないでしょう。しかし、孤児院で育ったという体験があるので、『不当な扱いを受けた。顧みられなかった』という怒り(想いb)には心のエネルギーは集中しがちなのだと思います。

そうすると、(想いb)にどんどんエネルギーが集まって、本来(想いa)に集まるはずであったエネルギーまで(想いb)が吸収してしまうと、ついにその(想いb)の山頂が点線のラインを越えて『争いのドラマ』がこの世に展開してしまうことになるのです。

ダイアーさんは危うくその不合理性に気づいて、(想いa)の実現が目的であったことを思い出したので、(想いb)に集まっていた心のエネルギーを再び(想いa)の山を高くするために使えるようになり、(想いa)の山頂が点線のラインをこえて「サンドイッチを食べる」というフィナーレを迎えるようになるドラマが現実の世界にあらわれたわけですね。

注意しているところ、つまり意を注いでいる(意識をフォーカスしているところ)に、心のエネルギーは集まるんだということを覚えておいた方がいいですね(善いことでも、悪いことでも)。

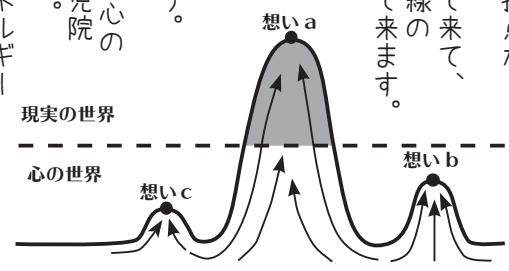
ダイアーさんのこの本の中には、意識を向ける方向を変えただけで(心のエネルギー分布が変わるので)、こじれていた状況が改善された実例がいくつか記録されています。

ダイアーさんの息子が、深夜のバーでけんかに巻き込まれて前歯を折り、けがをしたのです。

ダイアーさんは、なぜそんな場所に行くのか歯がみする思いで、息子さんに腹を立てたのです。

そんな時、ある本に『こんな状態ではなく、平和を選ぶことができる』とあったのを思い出し、その文句を心の中で何度もくりかえし称えているうちに、今までの苦悩から一気に解放されたのです。

そして、友人の歯医者さんのところに息子さんを連れてゆき、心安らかに息子さんと接することが出来ました。



それから、息子さんはもう二度と酒を飲んだり、バーに行ったりはしなくなりました。

ダイアーさんのお父さんはアルコール中毒で家庭をかえりみない人でした。だから、ダイアーさんは孤児院に入らねばならなかったのです。

ですから、息子さんのふるまいに、お父さんのふるまいを投影して、ガマンならなかったのですね。

しかし、人はそんな過去をいつまでも引きずる必要はないのです。『こんな状態でなく、平和を選ぶことができる』のです。

過去は過ぎ去ってもうないから過去なんだし、本当にあるのは今・ココだけなのです。

今・ココで、未来に向けてどの方向に歩み出すかは、その人の自由だし、決断なのです。

ダイアーさんは、船のたとえをあげています。船が進むと後ろに航跡が出来ますね。しかし、その過去の航跡がその船の未来の進路を決めるわけではありませんね。

どの方向に進むかは、今・ココのその人のカジ取りで決めることができます。

イエスと弟子たちが歩いていて、盲目の人に会いました。『先生、この人が盲目なのは誰の罪なのです。本人が過去に犯した罪によるのでしょうか。それとも両親の罪によるのでしょうか』

イエスは答えました。「本人の罪でもなければ両親の罪でもない。この人を通して神の栄光が光輝くために彼は盲目なんだよ」

すごいですね。イエスはその人の過去なんて全く問題にしていないのです。その人の今・ココを見て、そしてその人が光輝く可能性の未来しか見ていないのです。

ですから、そのイエスの確信に感染した盲目の人は、自らの過去の航跡を断ち切って、自らの可能性に目覚めたので、それにつれて、ついでに肉体の眼まで開いてしまったのです。

雲門禪師は、ある月の十五日に弟子たちに「十五日以前のことは問わない(過去は断ち切って)。さあ、十五日以後の君たちを一言で表現してみなさい(君たちは未来のどういう人生を今・ココで決断するのか)」とたずねました。

弟子たちは答えられませんでした。雲門さんは弟子に代わって答えました。

「日々是好日」と。

- どの日もどの日も
- みんな好い日
- これが私の決断
- つらい日も
- 悲しい日も
- みんな好い日
- これが私の決断

### 立花大敬(たちばな だいけい)さんの紹介

昭和23年大阪生まれ。大阪大学にて生物工学を研究。19歳(大学在学中)、禅に入門。以来、曹洞、臨済宗の諸老師に指導を受けてきた。42歳、伊勢神宮にて天命を知る。この時期と前後して、数年間に4冊の本を一気に出版する。

45歳で、進学校の高校教師となる。48歳、再び「筆の御用」を開始し、《しあわせ通信》を毎月発行。著書に「天界の禅者大いに語る」「悟」「禅」「禅の達人たち」「しあわせ通信第1集～第10集」などがあります。今回は「しあわせ通信第10集」に掲載されていた、「これが私の決断」を紹介させて頂きました(^^)